

高千穂の火山活動と前方後円墳の祭祀

東海大学文学部 北條芳隆

概要

高千穂の嶺は天孫降臨の舞台として知られますが、この神話の基本モチーフは2世紀末につくられた岡山県の楯築弥生墳丘墓に求められ、それを祖型とする前方後円墳の祭祀にあると考えます。楯築墓は火山の造形であり、被葬者を龍に転生させ天界へと飛翔させることを願う祭祀だった可能性が高いからです。

降臨とは逆の昇龍ですが、火山の噴火に天と地とを結ぶ経路をみる点で共通の心性だといえるでしょう。通説が説くような外来の天上他界観に由来する神話のモチーフではなく、火山活動が古来活発であった日本列島の倭人にとっては、なんの違和感もなく自然に醸成される感覚だったと考えます。

吉備の弥生人は琉球貝塚人との交流をもっていました。豊後水道を南下すれば豊後から日向にかけて並び立つ火山の嶺峰を遠望したはずです。高千穂の嶺もみえたはずです。こうした過去の見聞を基礎に王墓を火山に見立てる造形を思い至ったのが瀬戸内や近畿の倭人社会だったと考えます。

前方後円墳＝火山の造形説

この説は中世史学・景観史学の保立道久氏が唱えたものです。記・紀神話の主要な神格の基本モチーフは火山とその噴火に由来するものと捉え、関連する事象を探せば前方後円墳に行き着くと考えたのです。

日本列島で生まれた神話である以上、火山との関係は非常に深かったはずだとの見解は、国文学の益田勝美がかねてより主張していたことです。保立氏の説も益田説を発展させたものです。

ただし保立説は古代史学の定説的見解と対立しています。5世紀代までの倭人が抱いた他界観は、海の彼方の「常世の国」（海上他界）か、または山中にある「黄泉国」（山上他界）であったとする見解が支配的です。水平的な他界観の土着性を重視する説だといえるでしょう。一方、天上他界観は6世紀以降になって、外来の思想として挿入された垂直的他界観であると解釈するのが通説です。こちらは騎馬民族的な他界観に由来するもので、古代中国でも後漢代以降に採用された天の観念だ、というわけです。前方後円墳が誕生するのは3世紀後半なので、6世紀以前にはとうてい遡りえないはずだとの解釈です。

同時に保立説は考古学界からもほぼ完全に無視されています。しかし記紀神話の問題を考えるうえで、保立説は非常に重要な問題提起であると私は考えます。



最初の「王」の就任儀礼は吉備の楯築弥生墳丘墓で完成し実演された



遺骸を「龍王」に就任させる即位儀礼であった可能性が高い
「龍王」の象徴としての弧帯文石（春成秀爾説）

多数の巨石を30km以上も海路運び入れる空前絶後の造営事業
海民集団の積極関与なくしては実現不可能な一大事業

楯築弥生墳丘墓は昇龍の舞台

前方後円墳の祖型となったのは楯築弥生墳丘墓ですが、墳丘の上に置かれてきた「弧帯文石」は、春成秀爾氏によって人面龍体の石像彫刻だと指摘されました。正解だと私も考えます。となると、弧帯文石は地下に眠る被葬者を龍へと転生させ、墳頂部に置き直した造形だと捉えられます。

さらに弧帯文石の周囲には立石が立て並べられています。端部が尖る立石もありますので、それらは噴煙にみたてた造形だと考えることも許されるでしょう。つまり噴煙で囲まれた火口から龍が天に向けて飛翔する情景が墳頂部に作出されたとみるのが可能です。

楯築弥生墳丘墓のごく近隣の矢部遺跡からは同時代の龍頭を模った土製品も見つかっています。非常に写実的です。この資料も春成氏によって公表されました。龍は天界へと飛翔し、神仙思想のもとでは崑崙山に坐す西王母のもとへと死者の魂を誘う仙獣だとの思想も古代中国の前漢代にはありました。日本列島側での龍の受け止め方は、おそらく火山と噴火になぞらえるものだった可能性が高いとみてよいでしょう。火山信仰は弥生時代中期に遡って確認できるからです。

つまり楯築弥生墳丘墓は、死者を龍に転生させて火山の噴火口から天へと飛翔させる王墓の造形だったと理解されるのです。

過渡期の倭王だった初代卑弥呼



吉備勢力のあからさまな関与が目立つ初代倭王の君臨場所を相対化し、より普遍的な配置のなかに置きなおす志向性
「龍王」を戴く備讃勢力との政争に敗れ自死した彼女の姿
御諸山（弓月岳）に棲まい倭迹迹日百襲媛命を自殺に追い
やった大物主が蛇身であったという「日本書紀」の伝承

箸墓伝説と魏志倭人伝にある「以死卑弥呼」は二重写しになる

瀬戸内海沿岸部に残る濃厚な南方系の要素



ゴホウラ・イモガイ貝輪の濃密な分布
楯築弥生墳丘墓の弧帯文と直弧文の施されたゴホウラ貝輪
南からの移住者集団（海洋民か）が残した可能性の高い埋葬

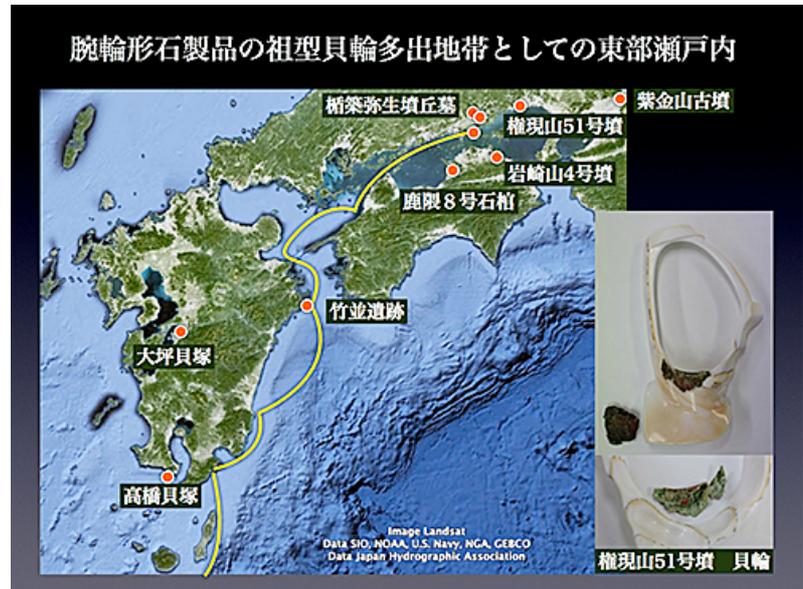
香川県観音寺市鹿製箱式石棺墓群8号（古墳時代前期中葉）

琉球との交流

吉備地域の弥生中期の文化は琉球の貝塚文化との交流をもっていたことがわかっています。岡山市南方遺跡からはゴホウラやイモガイなどのサンゴ礁域産の貝殻をペンダントに加

工した痕跡が見つかったので。この遺跡からは日向産の土器も出土しています。つまり豊後水道を伝って吉備-豊後-日向-奄美-沖縄を結ぶ海上の「貝の道」が開かれていたのです。

吉備で加工された南海産の貝殻はさらに東方世界にむけて出荷された可能性が濃厚です。この豊後水道「貝の道」は、非火山地帯の瀬戸内一帯の社会に九州東岸地帯の火山情報をもたらす経路でもあったと理解できるのです。



火山の怖れを知らなかった倭王権

ただし王墓を火山に見てる発想は、火山地帯の人々には思いもつかない所業だったに違いないと思います。火山噴火の災害と隣り合わせの社会では、火山は畏怖の対象でした。怖れ敬うこと、荒ぶる神を鎮めることこそが祭祀の中心的な主題だったに違いなく、それを王墓や昇龍の舞台とするなど、神を怖れぬ僭越の至り、といった感覚だったはずで

です。ですから梶築弥生墳丘墓も巨大前方後円墳も、瀬戸内や近畿地方でだったからこそ誕生しえたのです。倭王権が火山の造形を王墓の祭祀に重ね、火山にあやかろうと考えたのも、天孫降臨の舞台を火山に見立てる発想を抱けたのも、非火山地帯の住人だからこそなした所業だというべきでしょう。

東海東部で最初につくられた初期前方後方墳が富士山を遙拝する格好になっているのは、こうした地元側の消息を物語っています。

